

E-8 地方都市近郊平地農村の高齢者の居住形態(その2)

岐阜女子大家政 中野迪代

目的 地方都市平地農村の核大家族の住い方を、高齢者を中心に捉え、高齢者の持つ条件(配偶者の有無、性別、年齢、健康、実権の有無、役割分担)や家族構成が、高齢者の居室の有り方とどう対置しているかを知り、核大家族の住宅設計の一助としたい。

方法 典型的間取りが多く、別棟居住の多い三重県多気郡明和町の三部落の65才以上の高齢者のいる29世帯34人を対象とした住い方と聞き取り調査により、老若二夫婦の就寝及び経済関係に基き分類を行い、分類型別に高齢者を中心とする生活の特徴を比較検討。

結果 ①高齢者が夫婦で、比較的若く、健康な人は別棟居住が多く戸長屋型→母屋型→ハナレ型→門長屋型になる程その傾向が大。実権を残している人も多い。その時孫は C_2 (子供夫婦)と母屋で同居する傾向大。② C_1 (高齢者)が夫婦で C_2 と同棟の時は、おまるだけ離れた部屋を使い、クッション型→対角線型→隣接型になる程無配偶者が多くなる。③高齢者の片方が病気になったり、欠けたりすると(特に男性)同棟居住になる。その頃孫は成長して別棟居住が多くなる。④ C_2 と同棟居住の高齢者は、高年齢で体に故障のある役割分担のない人が多く、これらの人は南側に居室を持つ傾向がみられる。外へかと思うように出歩き、外り話を聞きたいし、さびしさが強くなる。年齢が高い程、病弱な程 C_2 の近くの部屋を居室とする。⑤ C_1 と C_2 が別棟居住の場合は高齢者と孫の同棟居住が孫の年齢と無関係に存在する。⑥孫が結婚する時、 C_1 と C_2 が別棟か同棟かは高齢者の条件によるが、孫は必ず別棟居住をし、門長尾を使う場合が大。⑦母屋居住の高齢者でも、野良仕事をし、健康な人は、北側居住が多い。⑧高齢者が孤立化すれば別棟居住の方が孤老的傾向が強くなる。